

〔袖中抄十三〕にほのうきす

あふことのなぎさによするにはのすのうきみ志づみ、物をこそおもへ

顯昭云、にほのうきすとは、にほといふとりの巣は波のうへにつくりをきてあるなれば、頼政卿も、にほのうきすのゆられきてとよめり、此義につくべしまさしく池などにあるは、あちこちくいもてありくと人々申せり、又十郎藏人行家が申けるは、にほのうきす、波にゆられてうかれありくことなし、蘆のくきをたよりにて、つくりつけたれば水に志たがひてふかくなれば、志たがひてうきのぼり、あさくなれば志たがひて志づ、みくだらるさればうきすとは云也、此六帖のうたは、なぎさによするといへるほどは、ゆられてありく心ときこえたり、末のうきみ志づみ、といへるはあしをたよりにてうき志づむときこえたり、又この志づむと云は、水の志たがひて志づむにや、さらばうきすといふにたがひぬべし、うきすのこと、もかうもあるべし、故左京亮の申されしは、にほはあからさまにもくがへのぼらぬ鳥とぞはべりし、されば巣を水のうへにうきてつくるにや、又伯母の集には、にほは水におつる鳥なりとかけり、高陽院歌合雪歌に、

ふみみけるにほの跡さへおしきかなこほりのうへにふれる志ら雪

〔無名秘抄上〕おなじたび殿上歌合 水鳥近馴といふ題におなじ人 頼政○源

子を思ふ鳩のうきすのゆられきて捨じとするやみがくれもせぬ此歌めづらしとてかちにき、祐盛法師これを見て、太に難じていはく、にほのうきすのやうをえ志らぬにこそ、かのうきすは、ゆられありくべきものにもあらず、うみのしほはみちひるものなれば、それを蒸りてにほのすをくふには、あしのくきを中にこめて、志かもかれをばくつろげて、めぐりにくひたれば、沙みてばかみへあがり、沙ひれば志たがひてくだるなり、ひとへにゆられありかんには、風ふかばいづくともなくゆられいで、大浪にくだかれ、人にもとられぬべし、されどその座に志れる人の